

安全・健康部会

I. 研究の概要

1. 研究課題

子どもたちが安全・健康について主体的に考えることができる実践はどうあるべきか

2. 研究内容

[研究内容 1]

- ①安全・危機管理
家庭や地域と連携し児童、生徒の安全を守る取組
- ②防災・減災教育
避難訓練の方法や特徴、地域との連携についての取組
- ③学校教育・環境整備
職場環境整備に関わる現状と問題点・日常の取組

[研究内容 2]

- ①食育と健康
給食指導・食物アレルギーの対応についての取組
- ②体力向上
体力向上のための取組

※上記に加え、昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症への対応についても研究内容に含めた。

- ・新型コロナウイルス感染症拡大防止のための環境整備
- ・行事の工夫、実践の状況
- ・家で過ごす時間が長くなることによって低下した児童生徒の体力向上の実践
- ・登校に恐怖を感じる児童生徒への心のケア
- ・その他、感染症の拡大防止に関わる実践

3. 研究方法

(1) 実践

- ① 各校での取組や現状分析を基本にして、実践を積み上げる。

(2) 研究協議会 → 各校での開催

- ① 研究協議会を行う中で、各校の実践発表を中心に交流を行う。
- ② 管内1ブロックで行う。全体で理論研修の後、2分科会をそれぞれ小グループに分ける。
- ③ 研究協議会の実施場所・方法などについては部会だよりにて連絡する。

(3) 啓発・発信・連絡

- ① 部会 HP などを通じ、有益な情報を提供したり、各種連絡などを行ったりする。
- ② 研究協議会で話し合われた内容については、HP、各種刊行物・関係機関へのはたらきかけを通し広く発信していく。

II. 実践研究の経過と成果

1. 実践研究の経過

(1) 部会役員研修会による研究経過

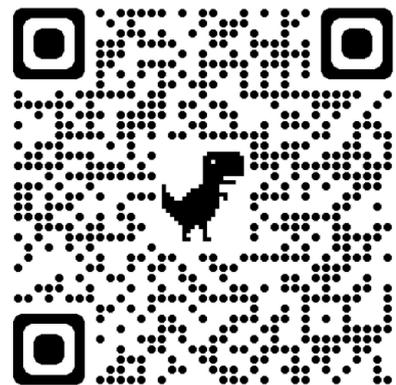
- 5月 6日 第1回部会役員研修会
研究計画の概要の確認、研究協議会のもち方について
- 8月20日 第2回部会役員研修会
研究の成果・課題のまとめと次年度研究計画について
- 9月 7日 石教研課題部会研究協議会
勤務校での開催
- 1月18日 第3回部会役員研修会

(2) 部会役員研修会での研究成果

- ・新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、今年度もレポート交流を中心として研究を進めることを確認した。
- ・提出レポートのテーマを確認し、部会員の興味や問題と感じている内容のキーワードについて検討した。
- ・現在の管内の学校環境や職場環境について協議し、今年度の学習会、特に分科会のもち方について検討した。残念ながら研究協議会は勤務校での開催となったが、次年度以降につながる協議となった。
- ・レポートの提出本数やその内容の充実が部会協議を活発にするため、どのような方法をとればレポートを書きやすいか、提出が増えるかを検討した。研究内容については、昨年度に引き続き、各学校で課題が多い新型コロナウイルス感染症への対応に関わる実践を含めることとした。感染防止のための環境整備や、教育課程の工夫など、多くの実践報告が寄せられた。
- ・理論研修で行う予定だった防災・減災に関する内容～Doはぐ（避難所運営ゲーム）～を第2回部会役員研修会の時に役員で行った。避難所設置の疑似想定体験を通じて、非常時への備えを意識しておく必要を感じた。



↑リニューアルしたHP
更新内容をトップページに記載しています



一度アクセスしてみてください！
QRコードからもぜひ！

2. 課題部会研究協議会内での交流

(1) 課題部会研究協議会での交流内容

新型コロナウイルス感染症の感染状況を踏まえ、課題部会研究協議会は、レポート集の作成と配付で実践交流を行うこととし、勤務校での開催となった。本部会として予定していた理論研修会は中止とした。

討議の柱 1

研究内容 1

- ①安全・危機管理
- ②防災・減災教育
- ③学校教育・環境整備

提言内容

○防災訓練・避難訓練

- ・コロナ禍ということを念頭に置いた訓練の実施報告が多数あった。
- ・避難生活体験学習として避難所運営ゲームがよかったと報告があった。(理論研修会でやる予定のものと同じ内容)
- ・道徳の授業と関連付けた防災教育(生命の尊さ)が行われた。

○学校、学級の危機管理

- ・不測の事態を想定した避難訓練の報告が複数あった。安心安全に過ごすためにどう行動すべきか日ごろから考えておくことが重要である。
- ・シナリオ無しの不審者対応訓練の報告があった。常に同じ場所にいるわけではないため、より本番に近い形で実施できた。

危機管理について、特に今は新型コロナウイルス感染症への対応で校内の環境を整備することで、子どもたちの意識を高めたり、より安全な状況をつくることにつながったりしていることがわかった。また、連絡体制の整備は、不測の事態でも円滑に連携を取るためにも必要なことだと感じた。

討議の柱 2

研究内容 2

- ①食育と健康
- ②体力向上

提言内容

○食育指導

- ・ペロリカードを作成したり、残食調査をしたりと各学校での工夫した取組が報告された。
- ・家庭科等の教科と連携し、食育授業を行っているが、時数の確保や新型コロナウイルス感染症への対応の観点から、校内テレビ放送で食育の学習をした報告があった。

○アレルギー対応

- ・エピペンの使い方について研修を行ったという報告が複数あった。
- ・新年度すぐにアレルギー対応について職員向けのミニ研修を行った。
- ・年度当初のアレルギー調査はもちろん、職員への周知の仕方や旅行的行事での対応など、子どもの命にかかわる重要な指導を行っている報告が複数あった。
- ・アナフィラキシー出現時の校内体制について、緊急時シミュレーション研修を行い、研修内容をまとめたレポートがあった。迷ったらエピペンを打つことが重要である。
- ・成分表の提示のみではなく、一步踏み込んだ対応(配付物への色付け、情報の共有)の工夫が報告された。

○体力向上

- ・短時間で気軽にできる「ちょいスポ」を行ったり、30秒体力アップタイムを設定したり、なわとびの跳んだ回数を全道地区に記録したりと、様々な工夫をしながら体力づくりに励んでいるという報告があった。
- ・特別支援学級において、朝学習や自立活動の時間を活用して体力づくりを行っているという報告があった。

コロナ禍で黙食が当たり前となってしまった中、食育指導をどうすればいいか、悩んでいる方もいると思うが、これまで安全・健康部会で積み上げてきた実践を活かし、校内放送等を活用した情報発信を中心に行うことが可能であると確認できた。

アレルギー対応は全職員の共通理解をもつことが大切で、実践報告の通り、年度当初に行うことが一番効果的であるとする。また、みんながエビペンを使えるように研修をしなければならない。命に関わることとして、重要であることを再確認したい。

コロナ禍で活動が制限される中、体力の低下が懸念される。そんな中においても、新型コロナウイルス感染症への対応を考えながらやり方を工夫した様々な実践がなされたことが報告された。日常的に、継続してとりくむことが大事であり、これまで行ってきた体力向上のためのとりくみを活かしながら、実践を広げていきたい。

討議の柱3

新型コロナウイルス感染症への対応に関わる実践報告

※討議ができなかったため、集まったレポートの概要をまとめている

※新型コロナウイルス感染症への対応に関する内容が中心だったものは討議の柱1に記載している

提言内容

○授業について

- ・マスクの息苦しさを軽減するために、授業中に深呼吸タイムをとったり、コの字型の個別パーテーションを置いたりする対応をとるといった報告があった。
- ・対策が難しい音楽と体育で、音楽ではリコーダー、鍵盤ハーモニカの使用を止めたり、共用で使う楽器の使用を見合わせたりする等の対応をとっていた。また、授業の形態も、学級単位での活動がベースで、学年単位での活動は必要最低限にとどめる等の指針を示している学校も多くあった。
- ・体育では、マスクをどうするかが一番の悩みの種で、運動直前にマスクを外す、運動の種目や内容に応じて条件を設けてマスクを外す、ポケットのある服装のお願いをする等、各校で熱中症対策も考えながらの対応が迫られた。
- ・飲み物を水かお茶に限定していたが、スポーツドリンクを可とした学校もあった。(気温が高い期間のみ)

○登校時の対応について

- ・朝の登校時、玄関で健康チェックを行っているという報告が複数あった。また、密を避ける工夫として、登校時に時差をつけて校内に入れたり、学年によって入口を変えたりする工夫も報告された。

○行事について

- ・運動会は時間確保、密回避の観点から、低学年と高学年の2部構成で実施したり、開閉会式を別の時間に行ったりした学校があった。
- ・卒業式では、新型コロナウイルス感染症の拡大防止に配慮した中でも、子どもが主役の卒業式となるように、保護者・在校生の参加人数を制限するなど工夫した様子が報告された。
- ・全校集会などの行事は密になってしまうため、ビデオ放送(テレビ会議アプリの活用)による集会の取組が報告された。

○熱中症対策について

- ・コロナ対策により常にマスク着用をしている状況であるが、コロナ禍での熱中症対策をどうするか、どう乗り切ったかという内容の報告が非常に多くあった。
- ・気温 28℃以上で熱中症の危険性が高い、というように、熱中症予防シートを作成し、気温とWBGT 値を夏の期間、掲示したという報告があった。熱中症計の設置やクーラーをつけた小会議室の活用等も報告された。
- ・学校現場にもエアコンが必要では！？という提案をまとめたレポートがあった。

○スクールサポートスタッフの活用

- ・学習指導員やスクールサポートスタッフが増員され、消毒作業や学習支援などの補助を行って

いる学校の報告が多くあった。石狩市では消毒作業を業者に委託していると報告があった。様々な人材を活用していく体制を広げてほしいとの願いがあった。

○危機管理マニュアルの策定・運用

- ・各校で策定している感染者発生時の対応マニュアル等をもとに、実際に発生してしまった経験をもとにどのように対応していくのが望ましいかを報告された。特に事前の確認が大切で、保護者との連絡共有の方法（メール配信 フォームで土日の集約を可能にする）等、具体的な報告があった。
- ・家庭内感染が広がる中、児童・生徒の兄弟姉妹関係による欠席理由の共有は必要不可欠である。同居家族の把握を小中連携として、行っている学校の報告があった。
- ・感染症対策委員会（校長・教頭・主幹教諭・教務主任・養護教諭・事務職員・必要に応じた職員）を組織したという報告があった。

○給食指導

- ・コロナ禍を考慮した給食指導についてのレポートが複数あった。
- ・給食時間に飛沫感染を防ぐための方策として、黙食の徹底や机に飛沫防止パーテーションを立てる、廊下を活用した配食等の工夫が報告された。
- ・給食だよりの活用や給食時間の放送で手洗い等の新型コロナウイルス感染症への対応について学習したという報告があった。

○職場環境の改善

- ・コロナ禍において、今では当たり前になりつつある web 会議の活用事例の報告があった。
- ・Google Workspace（ドライブ Meet カレンダー フォーム）を活用した職場環境の改善の報告があり、業務の効率化や軽減の実践が報告された。

○欠席している児童生徒への対応

- ・感染への不安、気持ちが落ち込んでいる子どもが増え、その現状を報告したレポートがあった。
- ・欠席している児童生徒の理由を絶対に教えない等の職員の対応の徹底を図っている様子があった。
- ・欠席している児童生徒の学習面の支援が急務であり、各校对応に苦慮している様子が報告された。
- ・道徳（命の指導）の授業を通して、心を育てていく実践が報告された。

合計 60 本のレポートが集まった。そのうち半分以上が新型コロナウイルスに関わるものとなり、昨年度の状況から好転しない事態に対して、各校がどのように対応したのかを交流することができた。昨年度よりも、一歩進めた実践が増え、コロナ禍においてこのようなレポート集が共有できたことは大変意義深いものだったと考える。

今回寄せられた実践レポートを読むと、どれも今できることを最大限考えて実践している。できないことを悲しむのではなく、できることを話し合いで工夫して取り組む姿勢がとても共感できる。部会内だけでなく、管内全体に発信し、連携してこの危機を乗り越えたい。

マスクをつけて学校生活を送るのが当たり前と思っている子どもたちの、学びの歩みが止まらないように、我々教職員が一丸となって実践を積み上げていきたい。ただ、我々に過度な負担がかからないように心がけることも大切で、教職員一人一人に身体的・精神的なゆとりができるよう、スクールサポートスタッフ等の人材を増やすような職場環境の改善を願っている。

Ⅲ、実技研修の内容

1. 講演会の内容（今年度は未実施。 実施予定だった内容を記載している。）
防災・減災に関する内容 ～Doはぐ（避難所運営ゲーム）・避難所の設置体験等～

講師 西澤 弘充 氏（北広島市役所総務部防災危機管理室危機管理課防災専門官防災士・総合危機管理士）

Ⅳ. 部会研究の成果と課題

1. 成果

- 昨年度よりも多くのレポートが集まり、コロナ禍において、「学びを止めない」こと意識した実践が多く報告された。コロナ禍での各校の様子を知ることができ、有意義な交流を行うことができた。
- 新型コロナウイルス感染症の対応に関わるもの以外では、研究課題に迫った実践報告が、研究内容1・2どちらにも寄せられた。コロナ禍でも、各校で子どもが主体的となって自身の安全、健康について考えられるような実践を積み重ねられていることがよくわかった。
- 各校でじっくりとレポートを読む時間があつたため、各校の取組を十分に知ることができた。
- 理論研修を行うことができなかったが、役員で実施した際、臨機応変な対応が必要であることを強く感じた。いつ災害が起こるかかわからないことを踏まえ、次年度、可能であれば同じ内容の研修ができればよいと考えている。

2. 課題

- HP がリニューアルし、部会だよりでお知らせしたが、まだ浸透していないと感じる。適宜、情報発信を行い、部会員全員でつながりを大切にする意識を向上させなければならない。
- コロナ禍で、今何ができるのか、どんなことができるのか、各学校の実践を情報共有し、みんなで取り組んでいくことが大切である。業務多忙でなかなか時間が取れないのが課題であり、今後も情報共有を強化していく必要がある。
- 部会員が直接会って交流をすることで、より理解が深まる部分があるのだが、その機会の確保ができなかった。
- 部会運営が思うようにできないことが歯がゆい。研究の歩みを止めないために、レポート交流を生かした実践を自校にも取り入れることができるかどうか課題である。

（ 文責 横山 卓巳 ）